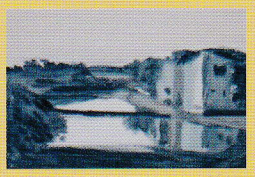
2014 November No. 68 （11月1日発行）



新九郎通信

発行　小田原市栄町2－13－3（株）伊勢治書店3F　ギャラリー新九郎　木下泰徳
メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

小田原恒例のツーデーマーチには、最高の季節がやって来た。今年も多くのウォーカーで街中が賑わう事だろう。心待ちにしていた小田原地下街 HARUNE もいよいよオープンだ。11月の新九郎も楽しみな展示が目白押しだ。ギャラリー帰りも、町中で買い物やお茶ができ楽しみが広がった。小田原の魅力を多くの方に楽しんでいただける賑やかな11月になりそうだ。

新九郎　11月の展覧会のご案内

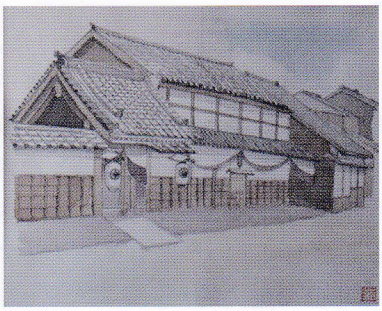
	会　期 展覧会名	見どころ
	11/5（水）～10（月） ラ・パレット油絵展 32回	指原いく子先生の教室作品展 油彩・水彩画約60点
	11/12（水）～17（月） 第2回フォトクラブ 風写真展	スナップ、風景、人物、アート、等バラエティに富む写真
	11/19（水）～24（月） 櫟会 第5回木版画展	モットーは“和を持って木版画を楽しむ”　13名50点の作品展
	11/21(金) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ！ 18:15-20:45　会費1500円 コスチューム、固定ポーズ
ATELIER KONEKO	11/26(水)～12/1(月) アトリエ・コネコ作品展	子どもクラス作品展 指導：藤本因子先生

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期・展覧会名	会　場
11/6（木）～11/10（月） りんどう絵画会グループ展	ツノダ画郎 0465-22-4250
11/20（木）～11/24（月） 第19回絵画研究会展	ツノダ画郎 0465-22-4250
11/5（水）～11/10（月） 第24回やまぼうし工芸展	飛鳥画郎 0465-24-3790
11/12(水）～11/17（月） 陶和会作陶展	飛鳥画郎 0465-24-3790
11/6(木）～11/10（月）曽根猛 米寿記念　父と娘の二人展	アオキ画郎2F 0465-23-5624
11/13（木）～11/17（月） 第14回水彩画クラブ展	アオキ画郎1F 0465-22-0825
10/28（火）～11/9（日） 大川雅大展	すどう美術館 0465-30-2950
11/11（火）～11/23（日）もあ 三次元の蟻は垣根を超える③い	すどう美術館 0465-30-2950
11/1（土）～11/8（土） 梅原美喜子・志村のどか	ぎゃらりー　ぜん 0463-83-4031
11/19（水）～11/24（月）岩橋格 帯・マンダラ by photos 展	ぎゃらりー　ぜん 0463-83-4031

東海道五十三次　15 二川宿（本陣馬場家）

5年をかけ、足で歩いたスケッチ紀行　松野光純

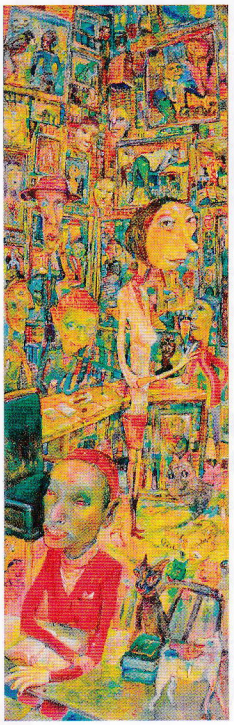


東海道五十三次33番目の宿場町で、豊橋市中心部のもうひとつの宿場町吉田宿と異なり、現在でも江戸時代の町割がほぼそのままの状態で残り、東海道筋では、ここと草津宿だけに現存する本陣の遺構がある。

二川宿本陣は、文化4年(1807)から明治3年(1870)まで本陣職を務めた馬場家の遺構で、邸内には東土蔵・西土蔵・母屋・玄関棟・表門が残っている。昭和63年より改修復元工事を行い、江戸時代末期の姿を再現した。本陣背後には、土蔵風の資料館を併設し、本陣と共に公開されている。

思うことなど

横井山 泰



すっかり秋である。栢山の田圃は裸になって広々としている。早朝と深夜に犬を連れて散歩していると、鼻の奥がキーンとなるくらい冷える日もある。冬が近い、一か月前までは灼熱だったアトリエは快適そのものである。今月はアトリエへの来客が多い、三島の個展で知り合ったIT企業家、パリ時代に妻がお世話になった某ブランドの重役ご夫妻、小田原地下街に出来るMARUTAさんの担当者、ひさしぶりのアトリエBBQ、個展のように作品を掛けてみた。そうすると、もっと大きな絵を描きたくなってくる。発表する場所に合わせてサイズや色彩を意識してしまうけれど、そんなことは関係なくアトリエで最大サイズの作品を作ってみようと思う。長い事放置していたホームページも作りなおす事にした。ここ最近、自分をみつめる機会が増えた。やることはやろう。さて11月にオープンする新しい小田原地下街のMARUTAさんのお店は随分と広いそうだ。陶器に彩色をした小さな小さな作品がどこかにあるので観付けて下さい。

『寄　稿』

新しいキュレーターの仕事とは

―「新九郎通信」を読んで―

OK DESIGN＆ARCHITECTURE　大倉冨美雄

地域への本当の理解は、今後の日本の「再開化」のために一番必要な課題です。最近、つくづく「難しいな」と思うのは、自分自身でも「地方の時代」と言っていながら、その本質への理解の浅さと、誰にとっても、現実に効果的に行動することは容易ではないという実感を得ているからです。そういう最中に、最近の新九郎通信67号の木下和子さんの記事、「第5回文化セミナー―学芸員の仕事と場の関わり―に参加して」（講師：広島市現代美術館学芸課長／神谷幸江氏　小田原市文化政策課主催）を読んで、感心することがありました。

神谷幸江さんの現代アート企画の成功が、固定概念を覆す展示にかける執念のようなものによって、何も無くなってしまった広島でこそ出来たとも取れる報告です。当然、「小田原ならどうする」との反問につながり、木下さんは、「体験して考え体現する場所、都市の開かれた場所として外も内も変わっていく」これからの美術館のあり方を教わったとし、そこに「物の展示だけではない、社会と表現をつなぐ媒介者」としてのキュレーターの発信力の重要性を感じています。

このことは全く正論で、私自身が地域からの発信の難しさへの浅い理解で行き詰っていると述べたことの裏返しなのです。私事になりますが、この国がいかに新しい創造行為への社会的合意が難しいかを実感していることもあって、相当に読みが深く、説得力と実行力のあるキュレーターでなければ、この、社会の激変期にあり、アート自体の激変も可能な世界のまとめはとても難しいのではないかと思うのです。

そのことは次のことを意味します。「この国が」ということは、国民性をも意味しているので、地域、地方といえども、この国民性を無視はできず、その成り立ちは中央集権、国家主導で来たこの１５０年あまりの体質に影響されているからです。更にはグローバリズムや金融資本主義化が進み、このことを相当明確に自覚しないと、市民がしっかり足元をみて生きることを難しくしているのです。市民の意識を変えていくに留まらず、中央との連携や広報もうまく取り付けることが求められているのです。

その意味で、新しいキュレーターは、視聴覚的な社会環境の激変を見据えるにとどまらず、見えにくく変革をこばむ人の意識や、社会の仕組みをも視野に入れていかねばならないという二重の責務を背負うことになるのです。これがわかってもそれだけでは学者です。この二重責務を戦略に置き換え、実行できる人でなければ、いつまでたっても「新しい革袋には新しい酒を」にはならないと思われるのです。

「新九郎通信」を読み、神谷さんの実行力を知り、今や、こんな話も受け入れられるのかなと思い出しているところです。新しい芸術文化創造センターが出来ても安心はできません。そこからが真の発信が試される時なのです。

絵てがみ折々　－小田原の暮らしの中で－

野地　三惠

今年も「城下町おだわらツーデーマーチ」が開催される。３０キロコースの途中に国府津山のウオーキングコースがあり、毎年二週間ほど前に、地元の人たちが山道を一斉に清掃している。

道に伸び出た木の枝や草を刈り取り、積もった落ち葉も土も取り除く。山の中腹から下の菅原神社の辺りまで掃き下ろしていく。大勢でやるのでどんどんはかどり、とても気持ちが良い。蜜柑畑の向こうには海も見えて、すばらしい景色だ。近くに住んでいても山に登る機会はなかなかなくて、何もかも新鮮に見える。

帰りに知人から、絵に描いてとあけびの実をもらった。木の高い所になっていたあけび。思いがけない嬉しいプレゼントだった。

10月のこと

10月は、小田原映画祭実行委員として運営に関わり、西相展、神奈川県美術展、板橋内野邸「蔵と海展」への出品と、なかなかにハードであった。

西相展では、深見まさ子さんの「花」に感銘を受けた。花弁をクロースアップして描いた作品はジョージア・オキーフを思わせるが、より日本的な装飾美による、洗練された画面が美しかった。守田智子さんの裸婦立像は力強く、裸婦に正面から取り組んでいる姿勢に好感をもてた。有南さんの絵はたどたどしく、いかにもアマチュアらしいが、色彩と線描は率直で魅力的だ。

県展平面立体部門の受賞者は、大賞始め女性が7名、男性は2名であった。最近はどの展覧会でも女性の活躍が目につく。対象の岡村さんには、暮れの新九郎アートフェスティバルに参加していただく予定です。お楽しみに。小田原・西湘地域では立体で平塚幹男さん。小泉恵一さん、平面で高橋洋子さん、木下泰徳が入選であった。㊍